

飯館校の本校施設（平成29年秋撮影）



主人公は福島市に住む飯館校生。彼らが飯館校の存続を支えて来たことにも改めて気づかされる劇です



東京公演の開場に並ぶ観客。4公演の前売り券は発売から9日間で完売しました

飯館校の未来を探る

相馬農業高校飯館校は、村の要望を受けて、平成20年に、分校から「飯館校」になりました。その大切な学校が、原発事故後はサテライト校に。避難が長引く中で村出身の生徒は減少。全体の入学者数も減少し、県が規定により平成30年度の募集を停止しました。

飯館校を再び村によみがえらせることができるか。募集停止を受けて、関係機関で、新たな模索が始まっています。

今後の可能性を議論
村で唯一の高校として、飯館校の募集再開を希望する村は、県教育委員会など関係機関と、「相馬農業高校飯館校の在り方に関する検討協議会」を立ち上げ、存続の新たな形を話し合っています。また、村立校化も可能性の一つとして検討しており、特色ある魅力的な学校づくりについて、「相馬飯館校の再生を考える会」で、議論を深めています。



「相馬飯館校の再生を考える会」は食や園芸の専門家も交えて魅力ある教育内容を議論します

「演劇が自分を変えた」

サテライト校の光を高くかざして

飯館校を舞台にした劇は、東京でも観客に届いていました。サテライト校の特殊な環境を浮かび上がらせながら、登場人物の抱える背景や心の内が静かに明かされる場面では、客席に涙が広がりました。それぞれの役の存在感も、しっかりと心をとらえていました。「演劇の力を感じた」「心に響いた。泣いてしまった」。終演後も感動の熱気が冷める気配はありませんでした。

「演劇をやってよかった」と部員達の表情が輝きました。「伝わる劇ができた」。地道なトレーニングにも取り組み、ぎりぎりの人数で支え合い活動してきた5人です。「演劇からすごく多くのものをもたらした。人前が出るのが苦手で、しゃべるのも怖かった僕が、勇気を持つコミュニケーションできるようになった。自己否定的だった僕は救われたのだと思います。一生懸命やれば成長できるんだって実感しています（後藤さん）。サテライト校での輝かしい成長。いつか仮設校舎がなくなっても、消えることのない確かな光です。」



終演の拍手に応え深々と一礼する部員。「心から感動した」客席には賞賛の声があふれていました

相馬農業高校飯館校演劇部

東京公演

平成30年2月11日・12日



ペンネーム
矢野青史

顧問・脚本
西田直人

サトル役
後藤遼翔
りゅうと

イクミ先生役
高橋夏海

ハルカ役
菅野千那

音響
半澤 楓

ユキ役
菅野優歩

副顧問・照明
佐藤佳代子

アトリエ春風舎（東京都板橋区）

詰り御礼

ラストステージは東京公演

- 平成23年度 県教育センターでサテライト校を開校
- 平成24年度 福島明成高校敷地内仮設校舎へ移転
- 平成25年度 サテライト校で単独の文化祭を開催
- 平成26年度 演劇愛好団結成。12月、演劇部発足
旗揚げ公演（福島市・こむこむ）
大会初参加
- 平成27年度 地区大会・県大会を突破し東北大会出場
- 平成28年度 12月、東北大会で最優秀賞を受賞
招待公演などが続く
- 平成29年度 8月、全国大会で優良賞・舞台美術賞受賞
2月、東京公演。3月、演劇部解散

相馬農業高校飯館校サテライト校。原発事故により避難した県立高校8校のうち、現在も生徒の通う唯一のサテライト校です。避難から7年。来年度は、飯館校でも生徒募集が停止されました。演劇部は、その仮設校舎で、平成26年に誕生しました。前任校でも演劇部を率いた西田直人先生の指導のもと、部員たちは演劇に向き合い、急速に力をつけて大会でも活躍。地区・県大会を勝ち抜き、東北ブロック代表として、昨夏の全国大会に出場するまでに成長しました。2月、都内の劇場に招かれての東京公演。「この劇の思いを観客に届ける」と2日間で4回の上演に臨んだ部員達は、全力の舞台で観客の心をとらえ、輝きました。そして3月1日、全員が3年生だった部員達の卒業をもって、飯館校演劇部は解散したのでした。



「サテライト仮想劇— いつか、その日に、」（東京公演）